



今回は、第2回 ダイバーシティSEKIシンポジウム の報告です。

◇ 高校生が企画・運営に関わるシンポジウムの第二弾、実施しました！

日時：令和30年6月30日(日) 13:30 ~ 16:40

場所：関市わかさプラザ 多目的ホール 参加者：約150名(スタッフを含む)

テーマ：「いろいろってなんだろう ~多様な性・多様な生き方~」

主催：関高等学校 中部学院大学 関市市民協働課

内容：LGBT問題にとりくんだ高校生が、市民とともに「多様な性」について考えるイベント。

講演：「違いを楽しめる社会を目指して」 市川武史氏

映画上映：「11歳の君へ ~いろんなカタチの好き~」

トークセッション： 高校生による多様性を認めあえる紙芝居発表

◇ LGBTフレンドリー宣言とダイバーシティSEKIシンポジウム

2016年、LGBTフレンドリー宣言を発表した関市。

その宣言を受けて、SGH課題研究の一環として活動を開始した関高校。関高生によるLGBT研究も、現2年生で4期目を迎え、さらには1年生グループも発足しています。

当事者支援団体、市役所、大学、企業等、様々な方々と交流を重ねる中で、いつしか、「多様な市民がおたがいを尊重し合い、みんなが暮らしやすく、認めあえるような、そんなまちをめざすワークショップを開こう！」という夢が広がりました。名付けて、ダイバーシティSEKIシンポジウム。

ダイバーシティとは、「多様性」の意味で、性別や国籍、年齢などに関わりなく、多様な人材を生かし最大限の能力を発揮できる社会を創り上よとの文脈で使われる言葉です。今年で第2回を迎えるシンポジウムは、講演会、映画上映、トークセッション、紙芝居上映と盛りだくさんでした。

性的マイノリティも、高齢者も、障がい者も、若者も、多様な市民がおたがいを尊重し合い、みんなが暮らしやすく、活躍することができるまちをめざす。そんなダイバーシティについて考える機会として、今回のイベントを企画したところ、スタッフを含めると150名の方々が会場に集まりました。



◇ 多様な性、多様な価値観をつつみこむ社会をめざして



関高 SGH 課題研究では、国連の SDG s を基準にし、テーマを設定を行っています。Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の 17 の目標の中には、ジェンダー平等、人や国の差別撤廃、住み続けられるまちづくりも掲げられています。

◇ 生徒の感想

■LGBT に代表されるセクシャルマイノリティーの研究は僕の視野を広げてくれました。何気なく選んだこのテーマでしたが、僕はこのテーマを選んで良かったと思います。

僕は性的少数者に対する差別的な考えがないと思っていました。それを否定されたのが最初のさくら塾です。そこで聞いた"当事者"の方の話で、僕の言葉や考えの端々に性的少数者に対する偏見があることに気づかされました。ここでいう偏見は、特別視と同義です。僕が先程使った"当事者"という言葉も特別視の表れです。そういったことをこの会で学びました。

僕の心に未だに強く残っている言葉は「性はグラデーション」というものです。セクシャルマイノリティーの当事者というものは実際には存在しない、作り上げられた存在だということを強く訴えている言葉だと思います。これは僕たちが大垣北高校で研究成果を発表したときにも、肝に銘じた言葉です。しかし、これを多くの人に伝えることはなかなか難しいことです。何故ならこの言葉はあまりに漠然としていて、かつ多くの人にとって性は「生物学的な性」であるからです。そしてその方が社会を運営していく上でも簡単です。そういった理由からセクシャルマイノリティーという概念が生まれたのではないかと思います。

「性はグラデーション」と多くの人の前で広告したにも関わらず、実際はその言葉をもて余していました。そんなとき、シンポジウムで市川さんの講演を聞いて、少し「性はグラデーション」という言葉に近づけた気がしました。市川さんは自身や友人の性を「性自認」「生物学的性」「性的志向」「性表現」の 4 つの観点から説明してく



くださいました。前のふたつしか知らなかった僕にとって、それは「性はグラデーション」という概念を理解する糸口になり、新たな学びとなりました。

自分の性は自分で決める。口でいうのは簡単で、実際に社会に適用するのは難しい。けれど適用されればきっと多くの方が暮らしやすくなる。「性はグラデーション」という言葉を通して、「性的少数者」の問題の奥深さと重要性を改めて感じました。

今の僕には「研究は僕の見方を"変えて"くれました」とは言えません。なぜなら今

でもかつてと同じように偏見的な考え方をしてしまっているときがあるからです。しかし、それは誰しもがそうだと思います。大切なのはその都度反省し次に生かすことだと気づきました。

マイノリティが生きやすい社会を作ることに関心をもつことが出来たことは僕のこれからの財産になると思います。これからも性的少数者とされる方々に対してはもちろんのこと、世の中でマイノリティのされる方々への見方を考え続けたいと思います。

■今回のイベントで二年間の活動に一区切りでした。

僕はこの研究を始める前、LGBT という言葉とその意味までは知っていましたが、その詳細については何も知らず、当事者の方の人口を知って驚いたことがありました。

研究を始めた当時、少し知識を得た頃は、「どうやって当事者の方々と接していこうか」「どうすれば傷つけずに済むか」ということを主に考えていましたが、それは今になってみると少し他人事のような気がします。もちろん、当事者の方々は、多少なりとも過去にいやな思いをしていることが多く、言葉選びなどといったことには敏感になる必要があります。

しかし、昔の僕は、そこを少し取り違えていて、当事者の方々を特別扱いしていました。しかし、当事者の方々と何度か接したり、研究を深めたりしていく中で、当事者の方々は自分達とは何ら変わらないことに気づきました。誰もが個性を持っていて、好みや価値観が違うという当たり前のことによりやく気づいたのです。そしてその時から、多様性というキーワードを意識するようになりました。

たくさんの方が世の中において、一人一人違う、それをお互いが認識して尊重することが結局のところ一番大切であると今は考えています。

肌の色をめぐる行われてきた差別が改善に向かったように、LGBT の差別問題も、やがて改善され、当事者の方々の心の拠り所になるような温かい社会になることを切に願っています。

この活動を通して、自分自身の心も成長することができました。いろんな人の生き方に触れ、同時に自分の生き方についても考えるきっかけになりました。僕も「自分らしさ」を大切にして、寛大な心で人に接していけるような大人を目指そうと改めて思うことができました。

この研究は、自分にとってものすごく価値のあるものになりました。この経験はきっと生涯心に残っていくと思います。

